

先人たちを想う

東京工科大学 石塚美佳

マサチューセッツ州ボストンから南へ1時間ほど行った先にあるプリマス (Plymouth)。大都市ではないので、何かきっかけがないと行かないと思っていたが、幸運にも2度、生徒・学生を引率して訪れる機会を得た。

プリマスは、1620年にイギリスでの宗教的迫害を逃れて新天地を求めて祖国を出発した清教徒たち、ピルグリム・ファーザーズ (the Pilgrim Fathers) が、メイフラワー号に乗って約60日間の航海の末にたどり着いた場所である。小さな船に多くの老若男女が乗り込み、9月から11月にかけて狭い貨物船の中で過ごしたために、脚気にかかって命を落とす人も多かったと聞く。プリマス港には、そのメイフラワー号が復元されていて見学することができる。プリマスの港からそれほど遠くない海岸には、プリマスロックと呼ばれる岩が据えられていて、表面には「1620」と刻まれている。これは、ピルグリム・ファーザーズがその上陸の第一歩を印したとされる岩だ。実際の岩は大きいので、その上半分だけを移動し、現在ある場所に移してきたらしい。目の前に広がるプリマスの海を眺めつつ、ピルグリムたちが経験した航海や入植地での生活を想像してみるのもよい。

プリマスの見どころの1つには、プリマス・プランテーションがある (Plymoth Plantation 注: プリマスという土地の名前は Plymouth と綴るが、プランテーションの名前には Plymoth が使われている)。これは、ピルグリムたちがつくった入植村の1627年当時の様子を、初代知事ブラッドフォードの日記をもとに再現したものだ。当時の人々が住んでいた家や集会所、使われていた道具



当時の生活を再現する人

(農耕具、鍛冶道具、調理器具等) や食料品が再現されている。そして、当時の服を着て、当時のように生活をしている人々と出会うことができる。もちろんスタッフなのだが、古いイギリス英語を話し、そのなりきりの徹底ぶりは見事だ。質問する時も、当時のピルグリムたちを指し示す三人称 (they) ではなく、二人称 (you) を使って質問すると、辛い航海のこと、初めての作物収穫に失敗した経験、日常生活などについて語ってくれる。当時には存在しなかった語 (electricity や computer 等) を使うと、それは何かと聞き返されてしまうほどだ。

プランテーション内のピルグリムたちの村を離れてしばらく歩くと、先住民ワンプノアグ族 (Wampanoag) の暮しぶりを再現している場所がある。ワンプノアグ族はピルグリムたちに作物の育て方、収穫方法などを教えたとされている人々で、彼らの指導によって作物の収穫が成功し、ピルグリムたちはそれを神に感謝して祝うようになった。11月の感謝祭 (Thanksgiving) の始まりである。

プリマスを散策しながら、アメリカ建国当時の歴史に思いをはせる機会を得たのは、今思い出しても良い経験であった。



表紙写真
について

クスコの炊き出し

麻布中学高等学校 岩佐洋一

クスコは1983年に世界文化遺産に指定され、世界中から観光客を集めているペルーの観光都市だ。標高3400メートルのアンデス山中の盆地に位置し、太陽神を崇拜するインカ帝国の都として栄えた。往時には、太陽の象徴である黄金で彩られた神殿や宮殿がまばゆいばかりにそびえ立っていたが、インカ帝国を滅ぼしたスペイン人により金銀は手当たりしだい略奪されていったという。

この写真は、町を散歩していて、たまたま撮った1枚である。インカの都クスコの中心にスペイン人が建てたカトリック大聖堂前での炊き出し風景だ。インカの末裔であるインディオ系のペルー人家族が長蛇の列を作って順番を待っている。子供連れのお母さんが多いが、中には近隣の村からはるばる山を越えてやってくる人たちもいるという。足元は、素足に古タイヤから作ったサンダル履きという人が多いのがわかるだろう。

クスコでは日本人宿に泊まった。そこでは、高山病予防のココ茶を飲みながら様々な日本人旅行者と話をした。その中には、クスコに来る夜行バスが横転するというアクシデントに見舞われたカップルもいた。幸い彼らは軽傷ですんだが、重症の人もかなりいたという。バス会社とはこれ

から補償金など交渉すると語っていたが、どうなったことか。トランクに入っていた荷物を受け取りに行った席では「軽傷ですんでラッキーでしたね。はい、さようなら。」という雰囲気だったようだ。かくいう私もペルーの首都リマで乗車したタクシーが追突事故を起こし、その場からそそくさと逃げるという経験をした。ペルーで車に乗る時は要注意のようだ。

さて、リマでも泊まりは日本人宿だった。宿の女主人は、あまり近づかないほうがいいエリアを親切に教えてくれ、ペルーの貧富の格差、それゆえの治安の悪さを語ってくれた。その中でも忘れられない言葉がある。

彼女がケーキ屋さんで買い物をしようとしていると、身なりはあまりきれいでないけれどかわいらしい女の子が本当にうらやましそうにケーキ棚に目を向けていた。貧しい人は見慣れている彼女だけれど、その時はその子に何か買ってあげたい気分になった。さぞ喜ぶだろうと思ってあげたケーキを女の子は食べようとしない。不思議に思い尋ねてみると、「家には兄弟がいるからこんなおいしいもの一人で食べたらもったいない。みんなで分けて食べようと思っているの。」とケーキを大事そうに抱え答えたという。

「貧しさは治安の悪さを招くこともあるけれど、人をやさしくすることもできるのよ。他人の痛みがよく理解できるようになるから。」という彼女の言葉は胸に刺さった。炊き出しに並ぶクスコの家族の姿が脳裏に浮かんだ。